2026年10月18日聖霊降臨後第21主日（マタイ22：15〜22）

ところで、どうお思いでしょうか、お教えください。皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。　　(マタイによる福音書22章17節)

今日の箇所にはこうあります。「それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した」。「罠にかける」、スキャンダルを探すのです。窮地に追い込もうとするのです。そして今日の箇所で、彼らはある質問をイエス様にするのです。

それは、「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」という質問です。彼らは自分の弟子たちをヘロデ派の人々と一緒に、イエス様のところに遣わせ、そのように尋ねさせました。その際に、このようにも言わせています。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てなさらないからです。ところで、どうお思いでしょうか、お教えください」。

慇懃無礼という言葉を辞書で引くと、「マタイ福音書22章16節を見よ」と書かれていてもおかしくないくらい、「全然そんなこと、心で思ってないでしょう」と突っ込みたくなるような言い方をイエス様に向けてしているのです。

そして、「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」と投げかける。この問いに対して「律法に適っている」と言えば、「神さまではなく、ローマ帝国に従うとは、どういうことなのか」と反発することになります。また「律法に適っていない」と答えたならば、ローマに対する反乱だと思われてしまう。そんな、どっちの答えを言っても立場が危うくなる、その中でイエス様は「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と答えるのです。

わたしたちはこの日本という地で教会に集う中で、どうしたらいいのか難しい状況に陥ることがあります。たとえば、こういうことを聞かれることがあります。「家族が仏教なんですけど、お墓どうしましょう？」。あるいは、こんなことを聞かれたこともあります。「今度知り合いのお葬式に行くんですが、お数珠をどうしましょう？お焼香はどうしたらいいですか？」。日本という地では、キリスト教は少数派です。人口の1%、教会に実際につながっている人数はもっと少ないと言われています。

2000年前、ユダヤの人たちはローマ帝国の支配下にありました。ユダヤの人たちはそのことによって、自分たちの信仰が揺れ動かされている、そのように思うことも多くあったと思います。

そして普段使っているデナリオン銀貨を見るたびに、その心のモヤモヤは大きくなっていったのでしょう。なぜならその銀貨にはローマ皇帝の肖像が彫られていたからです。さらに「ティベリウス・カエサル・アウグストゥス、神聖なアウグストゥスの息子」と彫られた言葉には、ローマ皇帝と神さまとを結びつける意味さえあったのです。

偶像崇拝をとても嫌っていたユダヤ人にとって、その銀貨を使うことは屈辱的なことでした。イエス様がエルサレム神殿に入ったとき、そこで商売をしていた人たちを追い出す記事がありました。その追い出された人の中に、両替商という人たちもいました。彼らはそこで何をしていたかというと、その銀貨を神殿で使えるものに両替していたのです。そんな偶像が刻まれた硬

貨など、神殿で使うわけにはいかない。そういうことでした。

そのモヤモヤの中で、反抗しようにもできないイライラの中で、彼らユダヤ人は必死に信仰を守ろうとしていたのです。決してイエス様を陥れる、それだけではなかった。信仰の答えもまた、彼らは欲していたのです。

そう考えるとこの問答は、わたしたちにとっても本当に身近なものだと考えさせられます。この「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」というイエス様の言葉を、もう少し深く考えていきたいと思います。

来月 11 月 11 日に、吉野にある金峯山寺で宗教者フォーラムがおこなわれます。わたしは今年からその実行委員に名前を連ねることになりました。奈良県宗教者フォーラム実行委員会は、13 団体からなっています。神社が 4 つ、仏教が 7 つ、そして立正佼成会とキリスト教からは奈良基督教会という 13 団体です。

わたしが奈良に来て 3 年目、となりの興福寺で「宗教者フォーラム」なる会合があることを知り、参加してみました。翌年は橿原神宮、そして西大寺、薬師寺と懇親会も含めて参加を続ける中で、ぜひ実行委員に加わって欲しいと誘われました。

2004 年から続いているこのフォーラムですが、キリスト教が加わったのは初めてだそうです。けれどもとても居心地の良い集まりです。それは宗教こそ違え、同じ宗教者として誰かの心に寄り添いたい、その思いが共通しているからだろうと思います。

当日のフォーラムの中で、基調講演のあと座談会がおこなわれます。そのときには実行委員がみな前に座り、「祈り」について分かち合うことになっています。「キリスト教の祈り、みんな興味があると思いますので、たくさん質問されますよ」と幹事の方に脅されましたが、とても楽しみです。その様子はまた、みなさんにお伝えしたいと思います。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」、そう聞いたときにわたしたちはどうしても、俗世間のものと神さまに関わるものとは別に考えればいいんだ」と思ってしまいます。でもそれは、単に自分たちだけを特別な者だとしているのにすぎません。

ファリサイ派の人たちは自分たちと汚れた人や異邦人、いわゆる俗世間とを分離することによって、自分たちを清く保とうとしました。自分たちは彼らとは違う、自分たちはローマとは違う。でもこのような思い、教会に連なるわたしたちは持たないでしょうか。

「神のものは神に」、そのイエス様の言葉の裏には、こんな思いがあるように感じるのです。「皇帝のもの？神さまのもの？そんな分かれているはずないじゃないか。すべてのものは、神さまからいただいたもの。すべてのものは、神の賜物なんだ。神さまは、決して人を分け隔てなさらない」。

イエス様はその言葉のあと、ほんの数日後に十字架につけられます。その十字架は、そして復活は、神さまがすべての人を愛している、そのしるしです。民族がどうだろうと、職業がどうだろうと、性別がどうだろうと、そして宗教がどうだろうと関係ない。そんなことは神さまの目からしたら、ちっぽけなことなのです。すべての人は神さまの大切な子どもです。わたしたちが「この人は違う」とか、「あの人はふさわしくない」とか、決めることはない。「神のものは神にかえす」ことが大事なのです。

隣の人を思いやり、その存在を認め、そして共に生きていく。そのことをいつも心に留め、歩んでいくことができますように。そしてそのような教会に連なる者として、わたしたちが用いられますように、祈ってまいりましょう。